

研究ノート 中国内蒙古自治区の生物調査隊に参加して

木場英久 (学芸員)



図1. 内蒙古の草原。

ありません。草原の植物はさほど密生はしていないので、光に対する競争も少ないように見えました。高さの競争が激しくないせいか、つる植物もあまり見られません。ふつう、ボタンヅルやカザグルマなどのつる植物を連想してしまうセンニンソウ属の植物も、茎が直立していました(図2)。

もうひとつ、特徴的だと思ったのは、葉の細い植物が多かったことです。イネ科やユリ科のネギ属、キク科のヨモギ属の植物が多様化しているのがアジアの内陸の植物相の特徴ですが、イネ科やネギ属のような単子葉植物ばかりでなく、双子葉植物でも葉が細かったり(図3)、ヨモギのように深く裂けて細い裂片に分かれているものがほとんどでした。

草原では、一ヶ所ではそうたくさんの種を採集することができません。歩いても、歩いても、草原の様子は変わりませんが、歩き続けていると、ひょっこり別の種に出会います。巨人になって雲の高さから見おろせば、草原にパッチ状に植物が生えているのがわかるのでしょうか。大草原で多くの種を採集するためには、移動することが肝心でした。そんなふうには、夢中で植物採集をしていると、遠くからエンジンの音が聞こえてきました。黒い点が段々近づいてきて、大きくなります。ジープが私を迎えにきてくれたのです。運転手さんは、目印の無いところで、どうやって私のことを見つけたのでしょうか。

私はひとり、大草原の真ん中でジープを降りました。「じゃあ、後で迎えに来るからね」といって、ジープは砂煙を上げて、轍を残して、小さくなって消えてしまいました。あたりを見回しても、地平線まで続く草原と、青い空と、白い雲しか見えません。風が草原の植物を揺らしていく音以外は、何も聞こえません。しばらくしても、雲と雲の影が、ゆっくりと通り過ぎていく以外は、景色も変わりません。内蒙古の草原はそんなところでした。

調査の目的

私は、今年の7月末から8月末までのあいだ、中国内蒙古自治区の生物調査隊に参加し、大草原を体験してきました。内蒙古やモンゴル人民共和国のあるモンゴルの草原は、古くから遊牧民が放牧を続けてきたところです。ここでは、放牧をしていて草が少なくなると移住するというやりかたで、草原を利用してきました。その結果、草原は使われない間に回復し、また利用できるようになるということを繰り返してきました。ところが、最近になって、人口の増加や定住化などの影響で草原の生態系のバランスが崩れ始めて来ています。草原の動植物が絶滅の危機に瀕しているのはわが国でも同じことです。

そこで、東京大学の高槻成紀先生は、日本生命財団の研究費を得て調査隊を組織し、内蒙古草原の現状を動植物の両面から調べることにしました。大きく言えば、野生生物と人類が共存するための研究です。

私はイネ科植物を専門にしています。草原はイネ科植物を主体としています。

ほとんどの属は日本でも見られ、共通種もたくさんあります。そこで、私はそれらの植物を比較することを目的で調査隊に参加しました。また、滅多に収集できない中国産の植物標本を国内に持ち帰ることも目的のひとつです。

内蒙古草原の気候

ここでは、夏には30℃を越す暑い日もありますが、年平均気温は氷点下2℃という、冬がとても寒いところです。サハリン(樺太)と同じ北緯49度あたりに位置しています。年間降水雨量は約300mmです。先日の台風で九州に一晚で900mmの雨が降ったことと比べると驚くべき少なさですね。植物は少ない水を使って短い生育期に育ち、花を咲かせ、実を結ばなければ生き残れません。

草原の植物

日本は雨がが多く、植物の生育に適した期間も長いので、人が手を加えずにいと、長い間に森林ができます。人手の触れていない草原があるのは、風の強いところや海岸など特殊な場所だけです。ふつうの場所で草原を放置すると、やがて密に植物が生え、光を取り合う高さの競争が始まり、背の低い植物は、背の高い植物の影になるので生き残れなくなります。樹木や、細い茎でも高さが稼げるつる植物にとって有利な環境になります。

一方、内蒙古では、雨が少ないため、森林ができずに乾いた草原が広がっています。崩壊地や川沿い、窪地などに低木が生えていましたが、大きな樹木はほとんど



図2. 茎が直立するセンニンソウ属の植物、*Clematis hexapetala*。



図3. 葉が細いトウヒレン属の植物、*Saussurea salicifolia*。